

## 奉行・戸田伊豆守氏栄

弘化四（一八四七）年二月、日光奉行であった戸田寛十郎が一柳に代わって浦賀奉行に就任した。この時、一柳の次のポストが日光奉行であったので全くの入れ替えであった。

新奉行の戸田は、寛政十一（一七九九）年の生まれであるから、そんなに若手の起用ではない。また戸田は家禄が五百石と歴代の浦賀奉行の中では、きわめて低い。もっとも明治維新が近くになると戸田よりも家禄の低い奉行も出てくる。ということは戸田への期待は何であったのであろうか。

日本造船史を技術史からだけでなく、政治史もからめて見直しをして、新たな問題点を次々に提示している安達裕之氏の名著『異様の船』では、新たに奉行就任した二人には小型でもいいから具体的な軍艦提案ができる人材の登用であったとしている。ビッドル来航後、軍艦の必要性を認めた浦賀奉行から出された案は、海に浮か

ぶ要塞のようなものであったので、もっと具体化したプランを出せることが託されたものと思われる。

安達説は、具体的なスループ形の軍艦図が提出されたのが、弘化四年九月であったことから、戸田の奉行が就任二月、もう一人の浅野長祚ながよしが五月の就任。となると就任の遅い浅野には時間的な余裕がないことで無理であろうとまず結論づけている。

では、戸田はどうかと言えば、天保年間に肥前佐賀藩では、オランダ人の手によって「バツテイラ」いう洋式船を幕府に無断で造り、お蔵入りになったことがあった。しかしこの船を造った時の船大工がおり、そこからの情報を手に入れば、幕閣が期待している軍艦に近いものを提示できる。では、どのようにして幕府からではなく、独自に入手できるか。それは佐賀藩主を利用することであった。でも浦賀奉行に成りたての戸田にそんな力があったのであろうか。さらに推理は進み、戸田の祖父（長崎奉行であった）が佐賀藩の造った洋式船の取り調べをしていたがわかった。となれば、佐賀藩には脅しが効く。この説を裏付けるように、この年、定例だと九月に参府する佐賀藩主の鍋島氏が六月に繰り上げて江戸に出て来

ており、そのことを宇和島藩主の伊達氏が水戸の徳川斉昭に書簡で知らせて「どうして」といつている。大いに可能性はあるが、史料でわかるのはここまで。

この洋式船建造計画が戸田でなければ、戸田は何のために浦賀奉行に抜擢されたのであろうか。さらに、こうしたことをすべてお見通しで、戸田を浦賀奉行に据えたとしたら、阿部伊勢守とはどれほどの大きな視野をもった人物であらうか。

同時期に奉行になった浅野の戸田評は「とんだ同役で迷惑至極」と酷評されている。これは上記のプランを提出した戸田に対する浅野の嫉妬とも思える。また、ペリー来航時の井戸石見守とは、井戸が就任してまもなくから私信で連絡を取り合い、良き先輩ぶりを発揮している。この私信は『南浦書信』として翻刻され、この中で与力・香山栄左衛門の活躍を高く評価している。

さらに、嘉永五年二月には、一年間の浦賀勤めを終えて、帰府する戸田に東西浦賀の住民から浦賀の安定のために定住をしてほしいとエールが送られている。このエールは浦賀奉行所の役人たちも賛同していた感があり、戸田の手柄を感じさせるものである。

---

ペリーも『遠征記』のなかで、二人の奉行を比較して、戸田を聡明そうな人物と評している。ペリー来航という危機を乗り越えたのも戸田の尽力あればこそである。  
(了)